2024年10月の総評に代えて　　高橋修宏

どうやって耐えてきたのと問われ
手のひらは青々とした木陰　　**桜望子（山形県）**

とりわけ、二行目の表現が印象的。作中主体にとって、この「手のひら」とは、かけがえのない実存の喩になっているのではないか。だが、同じ作者による「幸せになってねと握られる／てのひら／葉は内側から枯れていく」を見ると、けっして一義的なものではなく、どこか両義的（あるいは、多義的）な揺れさえも表象するものとして「てのひら」が捉えられているようである。

かーてんの
裏で
ふくらむ秋の陽の
焦げたバターのようなしきさい　　**さいう（石川県）**

「焦げたバターのような」とは、ありそうでなかった把握ではないか。「かーてんの／裏で／ふくらむ…」という描写も絶妙。直喩の表現に、新鮮な発見をもたらしている。

はち切れんばかりに芋虫の無邪気　　**杢いう子（佐賀県）**

「はちきれんばかり」、そして「無邪気」に、芋虫の生命感と無垢な輝きがカジュアルに表現されている。「芋虫」が苦手な評者にも、たしかに伝わってきました。

かげふみの影のまま蛇穴に入る　　**田崎森太（東京都）**

「蛇穴」に入るのが、実体ではなく「影」。そのことで「蛇穴」という季語の持つ闇の気配や異界性を、ひときわ際立たせた一句。

虫刺され膨れる
水の地球　　**吉沢　美香（宮城県）**

「膨れる」のが、等身大の人体ではなく「水の地球」としたことで、ワンダーな詩性が生まれた。二行による表記も効果的だ。

かなしみに
名前をつけて会いに行く　　**im（沖縄県）**

おそらく、「かなしみ」という感情は、それ自体、具体的に名辞されるものではないはず。「名前をつけ」会いに行くことによって、その「かなしみ」を飼いならしていくのだろうか。あるいは、作者にとって大事な標（しるべ）となっていくのだろうか。

誕生日としてあなたに訪れる　　**香取小春（宮崎県）**

この一句では、出来事と主体がねじれ、逆転しているように見える。だが、それだけで不思議なポエジーが生まれるのは、一年という周期で巡りくる「誕生日」という出来事のためかもしれない。

ねむるとき
なにかに落ちて
ぼくたちは
うまれるまえのじかんを生きる　　**うたた（岡山県）**

ひらがなを多用した、あどけない気配の中で、単に「なにかに落ちて」と記されるだけである。だが、われわれが眠ること、夢を見ることをめぐる、どこか深淵とも呼べる思惟が差し出されているようでもある。

みそ汁に彗星の落ちる音　　白藤　さくら（神奈川県）

日常の生活感あふれた「みそ汁」と、崇高な「彗星」との対比。ありえない光景でありながら、そのイメージは意表をつく。

林檎剥き終えてひとりの夜を待つ　　神崎まい（群馬県）

「ひとりの夜を待つ」にただよう静謐さ。それは、どこか一人だけの慎ましい祈りに似ているように感じる。

石室をひらく遥かな待ち合わせ　　桜庭　紀子（和歌山県）

この「石室」は、古墳のものだろうか。「遥かな」の措辞によって、悠久の時空を超えて死者との「待ち合わせ」が現前するような作品。

鏡台の右側だけにうつる母　　塩見　佯（沖縄県）

暗がりに触れて爪から消える妻　　塩見　佯（沖縄県）

どちらの句も和製ホラーのような感触がただよう。おそらく、「鏡台」と「母」、そして「爪」と「妻」というモチーフが効果的に配され、湿気を帯びた不気味な余白を感じさせるためではなかろうか。

口のなかへ玉は運ばれ国となる
あなたがいるところこそ彼方　　**互井宇宙論（埼玉県）**

「口」と「玉」と「国」。その三つの漢字のフォルムをめぐる図像、それらを結ぶ儀礼のような振るまいを明示する一行目、さらに最後に唐突に置かれた「彼方」――。どこか思弁的でありながらも、忘れがたい印象をもたらす。